

現場に行つて、そこで学ぶ。
知はフィールドにあり。

夏季に30日間のバカンスを取るフランスの習慣。私たちから見ると、うちやましい限り。でも、フランス人が最初からバカンス好きなのではありません。大恐慌の影響が残る1930年代に作られた有給休暇法によって必然的に休暇が増え、バカンスの過ごし方が成熟していったのです。日本人のスローライフのヒントになりそうな、そんな話。帝京大学の経済学部観光経営学科では、休暇のあり方を真剣に考えている学生がいます。「こんにちは。草津温泉にはよく来られるんですか?」。そんなひと言から始まるフィールドワーク実習は、秋晴れのもと、草津温泉の中心地・湯畑前で行われました。2年生・小幡沙織さんのチームは、草津温泉の景観がテーマ。「宿や土産物店など草津に暮らす人々と観光客の方々にお話を伺って、この街並をどう思っているのかをリサーチしています。湯畑のように真ん中に広場がある街って、日本では珍しいと言われました。そこを中心に人が集まって時間を過ごせるのは、ヨーロッパの街のあり方に近いのかな。みんなが休暇を過ごしたいと思える街ってどんなものか、何を残してどこを変えるとよいか、もっと聞き取りをして

草津のこれからを考えたいです」。調査一人目は緊張感でいっぱいだけど、だんだん慣れてくると笑顔もこぼれます。こんな実践的なカリキュラムを主宰するのは白坂蕃教授。「世の中を考えるとときに、教室で勉強するのも大事なのですが、実際に現場に行つてみて、これは何だろうか。って考えるのが一番の近道。理屈じやなくて現実を見る。それがフィールドワーク。マーケティングに通じるデータ収集法はもちろん、初対面の方にお話を聞くマナーや言葉遣い、他人を説得させるレポートの作り方まで、社会人になって役立つ知恵が詰まった教育なんです。最初はどんなにつたなくても、繰り返し経験して身に付けていく。大学で大切なことは論理的思考と客観的分析能力を養うことですから」。教授ご自身もつい2日前にルーマニアから戻ってきたばかりという生粋のフィールドワーカー。「山の中で羊を追いかけていたんです(笑)。私の興味は自然環境をどんな風を利用して、人間生活が成り立っているかというもの。草津の場合だと、観光と自然と人間。それらがどう絡んで観光地ができ上がっているのかを、学生に知ってもらいたいですね」。勇気を出して一步現場に踏み込むと、そこから新しい世界が広がります。知はフィールドにあり。

feel TEIKYO ft

あなたにつながる帝京大学 撮影・野川かさね



帝京大学 本部大学PR推進室
TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1



帝京大学をもっと感じるマガジンをお届けします
帝京大学のあれこれを心地よい写真とともにお届けする冊子
『feel TEIKYO』キャンパスライフ編・ジョブガイド編を配布中。
請求先 03-3964-4162 (本部大学PR推進室)